

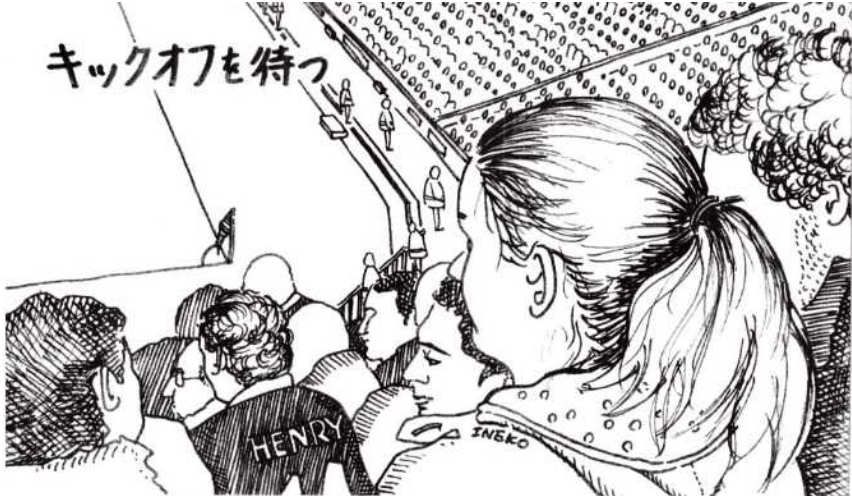
2007年 4月15日発行（隔月刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2007年4月
第 61号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



目 次

漢点字の散歩（序）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（57）（山内 薫）	5
酔夢亭読書日記（第20回）（酔夢亭）	8
見果てぬ夢を（4）（山本優子）	10
漢点字訳書のご紹介・生田典子著 『アメリカはカースト社会 ～公立高校の教壇から～』	15
「東京漢点字羽化の会」 第15、16回例会報告とわたくしごと（木村多恵子）	19
漢文のページ	23
漢点字講習用テキスト（初級編・第2回）	30
ご報告とご案内	31

漢点字の散歩（序）

岡田 健嗣



序

本誌『うか』は、本会・横浜漢点字羽化の会の機関誌として一九九七年に創刊されて、本号から十一年目に入ります。本誌を発行するには、ご執筆いただいた皆様は勿論のこと、編集に当たって下さった（ている）皆様、印刷、製本、発送に当たって下さっている皆様、また歴代の表紙絵をご製作下さっている皆様のご尽力あつてのこと、感謝しても足りない思いでおります。加えて視覚障害者の読者向けに、音訳の労を担って下さっている音訳者の皆様には、とりわけお世話をおかけしております。点字符号をどう読むか、拙文のような未熟な文章を、耳で聴いて如何に理解できるように読み上げるか、九〇分テープ一本に収まるよう、如何に要領よく時間を配分するか等々、毎号限られた時日の中でのご尽力に、誠に感謝に耐えませ

ん。
このようにして本誌を発行して参りましたが、その

紙面を借りて私は、〈漢点字〉の普及の状況を分析して、どこに課題があるかを探ってみたい気持ちを抑えられませんでした。私が〈漢点字〉に巡り会って、計り知れない恩恵に預かっているのに、多くの視覚障害者は、積極的にアプローチしているように見えなかったからで、その理由は何だろう（？）と、ずっと疑問を抱いていたからに他なりません。

先ず私が試みたのは、〈漢点字〉の創案者である川上泰一先生のコンセプトの先頭に挙げられる、〈触読〉についての考察でした。

〈触読〉という考えは、視覚障害者は視覚に障害を負っている、視覚に代わって〈文字〉を読むことのできる感覚器官は〈触覚〉を置いてない、というところから始まります。

ルイ・ブライユが〈点字〉を案出したのは、それまで満足できる〈触読文字〉がなかったことから、①独力で読み書きができること、②さらに「文章」を読むことができること、を念頭に置いてのことでした。現在私たちが使用している〈点字〉は、このブライユの考え方を基礎としているものです。この〈点字〉は、このように〈触読〉を第一義的な目的として置いたために、「墨字」（アルファベット）の形とは似ても似

つかないものになりました。そのために長いこと世の中、とりわけ盲教育関係者に受け入れられず、一部の視覚障害者の間に流布されるに留まっていました。反対の面から言えば、それまでの〈触読文字〉とされていた、普通の〈文字〉を浮き彫りにしたものは、独力で読み書きできるものではなかったし、「文章」を読むには不適當なものだったと言えるのでした。にもかかわらず〈点字〉は、簡単には普及しませんでした。

しかしブライユの〈点字〉は、彼の死後、世界中に知られ、使われるようになりました。それは一つに、「読める〈文字〉」、「書ける〈文字〉」として、視覚障害者の文化に欠かせない〈触読文字〉という位置づけを得ることに成功したからでした。

〈漢点字〉を巡る情況も、ブライユの〈点字〉を巡る情況と、私にはその意味で大変似通って見えています。川上先生は、〈文字〉の働きとして、第一義的に「読み」を置かれましたが、現状では中々受け入れられてはおりません。そこで私は、〈触読〉とは何か(？)と問うて見ました。(拙稿『点字の読みづらさと漢点字の触読について』、本誌バックナンバー11〜42号に延べ23回にわたって掲載)

次に、我が国の視覚障害者が置かれている社会の環

境、これは一般に「社会福祉」と一括して語られるところから、その〈福祉〉の理念と喧伝されるノーマライゼーションをキーワードに考えてみました。

ノーマライゼーションとは、「ハンディキャップを持つ人たちを、そのハンディキャップを克服して社会に適応させるのではなく、社会を変えて、その人たちが生き易くなるようにして行くこと」と定義されています。

この側面から言えば、社会を変えて行くことが大きな眼目ということになりますが、さて、社会の何を、どのように変えるのか、その辺りを探ってみたかった。がむしろ視覚障害者には、視覚障害者の織りなす社会、「共同体」と言ってもよいほどの社会の、案外強固な帰属意識を伴った組織を構成しているようだ、そのように捉えるようになって行きました。つまり社会を変える前に、視覚障害者自身が変わることからノーマライゼーションは始まる、そのように考えるようになったのでした。(拙稿『Normal, Normalize, Normalization』、本誌バックナンバー 55〜59号に延べ4回掲載)

私が盲学校を卒業して社会に出て、最も大きなショックと困難を感じたのは、私には〈漢字〉の知識がな

かったことでした。盲学校では〈漢字〉を習得する機会を与えられなかったからです。日本語は「漢字仮名交じり」で表されます。〈漢字〉の知識なしには、言葉を使いこなすことができない、そしてこの〈言葉〉こそが、社会を動かす原動力であり、情報のフィードバックの本体であることを、強く思い知らされたのでした。言い換えれば、〈言葉〉が貧困であれば、そのようにしか生きられない、努力の可能性も閉ざされてしまう、このことが骨身に沁みたのでした。このようなことは視覚障害者は誰しもが経験していることで、であるならば誰しもが〈漢字〉を習得する機会があれば、それに邁進するに違いない、そう疑わずにいたのでした。

〈漢点字〉に出会って、私は〈漢字〉の世界を知りました。そしてそれが私の予想を違えず、〈言葉〉の可能性、努力の可能性を保証してくれたのでした。

しかし、「誰しもが〈漢点字〉の習得に邁進するはず」という信は見事に外れて、現在では〈点字〉という〈触読文字〉も、忘れ去られる運命のようです。「パソコンで読み書きできるから」、「パソコンの音声ガイドで〈漢字〉の説明があるから」、それで充分というのが大方の考えのようです。

次号から、このような状況の下、お一人のご要望でもそれにお答えするために、〈漢点字〉のテキストを書きながら、本稿では、その中で調べたことや気付いたことをご紹介したいと考えております。

【付記】

かつて〈触読〉について論じました。その後も幾らかの経験を積んでいる中で、ふと気付かされたことがあります。〈漢点字〉の〈触読〉は、従来のカナだけの点字の文章を読むときは、明らかに違った指の動きがあります。

私が学校の小学部に入学したのは一九五〇年代の半ば、盲学校自体を卒業したのが一九七〇年でした。最初に教えられたのが、点字（カナ）の「書き方」と「読み方」でした。その「読み方」は、横書きの点字の一行の半ばから左側を左手の人差し指、右側を右手の人差し指で読むというものでした。先ず最上行の左端に左手の人差し指を触れて行の半ばまで滑らせます。そこで右手の人差し指にバトンタッチして、左手は次の行の左端に置いてスタンバイします。その間に右手の人差し指は行の右端まで読んで、次の行の左手にバトンタッチします。これを連続させて読むのです。誠に理に合った動きのように思われます。

ところから〈漢点字〉の文は、このようには読めません。一文字一文字を確認するようにして読みます。右手と左手は、常に相携えた位置にあります。従って従来のカナ点字の文を読む要領で〈漢点字〉の文を読むとうとしますと、「読めない」ということになります。〈漢点字〉の文を読み難いと感じられる人は、先ずこのことに留意していただかなければなりません。

〈漢点字〉の〈触読〉とよく似た動きをするものがあります。他でもない、「英語点字」を読む仕方です。「英語点字」は「略字」と呼ばれるアルファベット以外の点字符号が使用されます。その多くが単語の単位で、「略語」と呼ばれます。〈漢字〉も「単語」ですから、〈触読〉に当たって、指が似た動きをするのも領けるとも言えます。

逆に、従来のカナ点字の文章の〈触読〉は、日本語の音を追っているだけで、「単語」を単位とした読みはできないであろうことも、充分領けることと思われま

(以下次号)

【付録】 英語点字の略語 (アルファベットで記述)

(1 文字) b=but c=can d=do e=every f=from g=go
h=have j=just k=knowledge l=like m=more n=not
p=people q=quite r=rather s=so t=that u=us
v=very w=will x=it y=you z=as

(2 字以上)

ab=about abv=above ac=according acr=across af=after
afn=afternoon afw=afterward ag=again alm=almost
alr=already al=also alt=altogether alw=always
bl=blind brl=braille cd=could dcv=deceive dcl=declare
ei=either fr=frend gd=good grt=great hm=him
hmf=himself imm=immediate xs=its xf=itself lr=letter
ll=little myf=myself nec=necessary nei=neither pd=paid
qk=quick rcv=receive rjc=rejoice sd=said td=today
tgr=togather tm=tomorrow tn[~]=tonight wd=would yr=your
yrf=yourself yrvs=yourselves

点字から識字までの距離(五七)

みどり学級へのサービス(六)

みどり学級での公開授業(二)

山内 薫(墨田区立あずま図書館)

年が明けて一月の末に担任のD先生と打合せをし、先生が指導案を作成した。教科は国語や総合的な学習の時間ではなく「生活単元」となっていた。この生活単元というのは特別支援教育の中で「児童生徒が生活上の課題処理や問題解決のための一連の目的活動を組織的に経験することによって、自立的な生活に必要な事柄を実際の・総合的に学習するもの。」また「生活単元学習の指導では、いろいろな領域や教科に関わる広範囲の内容が含まれる。」とされている。さらに生活単元学習の備えるべき条件として「実際の生活から発展し、生徒の興味に基づいたものであること。」

「生徒の心身の発達水準などにあつたものであり、個人差の大きい生徒の集団に適應するものであること。」

「必要な知識・技能の獲得とともに、生活上の望ましい習慣・態度形成をはかるものであること。」

「生徒が目標を持ち、見通しを持って、単元活動に積極的に取り組むものであること。」

「一人ひとりの生

徒が力を発揮し、取り組むとともに、集団全体が単元の活動に共同して取り組めるものであること。」

「それが終わったときに、生徒が大きな満足・成就感が味わえるものであること。」

「単元の活動によって身に付けた関心・技能・習慣・態度が学校外の生活にも適用され、単元終了後の生活にも生かされるようなものであること。」

「等々がうたわれている。(長崎県教育センターのホームページより)

今回の公開授業指導案の題は「お話しを楽しもう『三びきのやぎのがらがらどん』」で、活動の目標は「・緑図書館の方々とふれあいを通して、お話しを楽しむとともに、いろいろな本があることを知る。・読書活動に参加し、本の世界を楽しむことができる」の二つが設定されていた。公開授業指導案の取り組みの経緯は五時限で構成され、一時間目が導入で、『三びきのやぎのがらがらどん』の読み語りと歌の練習、二時間目から三時間目にかけては「やぎのお面をつくるう!」で、ヤギのお面や背景作り、三時間目は「本に出てくる音(擬音語)をさがそう!」で、絵本の中に出てくる音と似ている楽器さがし。四時間目が「緑図書館の方との劇遊び1『三びきのやぎのがらがらどん』」。五時間目が公開授業の本番で、「かいじゅうのブックトークと『三びきのやぎのがらがらどん』の

劇あそび2」となっていた。

また、学習活動の展開では「読み語り（緑図書館職員）を聞く『かいじゅうたちのいるところ』」「ブックトーク（緑図書館職員）テーマ「かいじゅう」『つきよのかいじゅう』など」が組み込まれていた。そこで今回の公開授業に合わせて『かいじゅうたちのいるところ』（モーリス・センダック さく、じんぐうてるお やく 富山房）のジグソーパズルを作成することにした。廃棄した絵本を利用したジグソーパズルは以前から数多く作成してきた。絵本は図書館の資料の中でも群を抜いて利用度が高く、良く借りられる絵本は複本といって、複数購入して蔵書にするのが普通である。人気の絵本は小さな子供たちに何百回も借りて行かれるので消耗も激しく、破損も多い。しかし中にはいたずら書きやページが破れてしまったために、それ程消耗していなくても廃棄せざるを得ない絵本も出てくる。そうした絵本のまだ痛んでいないページを利用してジグソーパズルを作るのである。材料は絵本のページの他に厚いボール紙で作られた本の外箱（最低でも厚さ二〜三ミリ）を使う。最近では外箱入りの本が少なくなってきたが、それでも高価本や全集などは箱に入っているものが今でもある。一般に図書館の蔵書として書架に並べる本は外箱を付けないので、多くの

図書館で外箱は捨てられる運命にある。絵本のジグソーパズルはそうした捨てられてしまう本の外箱の廃物利用も兼ねている。外箱は分解して表紙と裏表紙に当たる大きい二つの面を利用する。

ジグソーパズル作りの手順は以下のようなものである。

(一) パズルにしたい絵本の一ページを選ぶ。

(二) そのページよりも一回り大きい本の外箱の内側の白い面に木工用ボンドを塗り、絵を貼り付ける。この際木工用ボンドは凹凸が出来ないように薄く均一に塗る必要がある。ヘラか縁が直線の割り箸などを利用してボンドを均す。また絵を貼った後、絵を傷つけない材質の平らなもので上から押しをして良く貼り付くようにする。私は以前は木製のジッポライター、最近ではワインの栓のコルクを使っている。

(三) ボンドが乾いたらジグソーにする部分を切り抜く。パズルの形は任意だが、通常は四角く切り抜き、最終的な外縁（パズル全体の大きさ）よりも最低一センチは余白を残した内側を切り抜く。また例えば『りんごのき』（エドアルド・ペチシカ ぶん、ヘレナ・ズマトリーコバー え、うちだりさこ やく 福音館書店）という正方形の絵本の場合などは、リンゴの形に切り抜き、内側に赤い艶紙を貼るなどの工夫をする

ことが出来る。(写真一)



写真1 りんごのき

角が鋭角になると絵が剥がれやすくなったり、角が潰れやすくなる。またカッターを使って切ると切り口が斜めになるので、切ったままでは枠の内側に収まりきらなくなる。従って真上から見て切り口が絵よりもはみ出している部分は丁寧に切り落とす必要がある。

(五) 内側をくり抜いたパズルの外側をもう一つの外箱の厚紙に貼り付ける。その際内側に色紙を貼ったり、他のページの絵を貼ると良い。例えばミッフィーで知られる『ちいさなうさこちゃん』(デック・ブルーナ ぶん・え、いしいもこ やく 福音館書店)

(四) 切り抜いた内側の部分はカッターで自由に切つてゆくのだが、各ピースの大きさが余り不揃いにならないこと、各ピースの切り口の接点出来るだけ直角になるようにすることなどを気を付けたい。ピースの

のシリーズには「泣いているうさこちゃん」と「笑っているうさこちゃん」、「水着のうさこちゃん」など様々なうさこちゃんのページがあり、ほとんどが同じ大きさで顔が重なるので、下絵に「泣いているうさこちゃん」を使い、ジグソーに「笑っているうさこちゃん」を使うと泣き顔から笑い顔に替わるパズルが作れる。外枠にたつぷり木工用ボンドを付けて電話帳や百科事典など重い本で押しをして乾くのを待つ。乾いたら外側をきれいに裁ち、ピースを埋め込んでできあがりとなる。

今回みどり学級のために作成したジグソーパズルは『かいじゅうたちのいるところ』のパズルで一二種類作成した。パズルはほぼ二〇から三〇ピースで、すべて正方形を組み合わせた図形のピースとした。同一の正方形が三つで組み合わせられた図形は「トロミノ」といい縦長と矩形の二種類の形、四つで組み合わせられた図形は「テトロミノ」といい五種類の形が出来る。正方形が五つのもものは「ペントミノ」と呼ばれ一二種類の形が出来る。この三種類の図形と、それぞれ難易度別にピースの数を決めて作成した。

パズルは評判で子どもたちは公開授業の前に何度も楽しんでようだ。補助教員の先生は「本への導入としてこんなに良い教材はない」と言ってくれた。



写真3 パズルに興じる子ども



写真4 パズルに興じる子ども

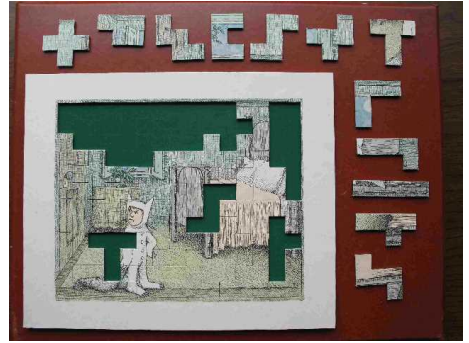


写真2 かいじゅうたち

(写真二) 『かいじゅうたちのいるところ』のペントミノのパズルと一二種類の図形

(写真三・四) パズルに興じるみどり学級の子ども

酔夢亭読書日記(第20回)

酔夢亭

某月某日。

「マンガを読んで小説家になろう！」(大内明日香、若桜木虔共著)を読んだ。

「純文学小説家志望者」、「金持ちになりたくない人」、「大天才の方」お断り、「ドキドキワクワクするお話が書きたい」、「お金を儲けたい」、「作家としてちやほやされたい！」というような煩惱全開のもの来たれ、という本である。まさに私のために書かれたような本ではないか？

小説を読んで、つまり字で書かれたものを読むよりも、マンガの方がストーリーの組み立てが簡単にわかるということである。それに漫画本の世界は厳しくて、売れてなんぼのもので、読まなければ即連載中止になるらしい。要するにお話がおもしろいものでなければいけない。

私もこれまでなんだか小説を書こうと試みたが、書いているうちに自分でつまらなくなってくるのである。世の中にはおもしろい本がいっぱいあるのだから、そっちを楽しんだ方が良くはないか、と精神は



荒野を指ささないで、安楽を目指してすたこら逃げていく。技術も設計図もなくいきなり家を建てることは無謀であることは分かるのに、ものを書くことには技術も設計図も無く挑むのだから、挫折して当然である。なまじ作文のようなものや、日記のようなつれづれが簡単に書いてしまうので錯覚を起こしてしまうらしい。自分だけがおもしろがって読む人の身になっていなければいくらだつて書けるわけだ。それは一種の呪文みたいなものだ。こんなことを綴っているとこの拙文自体が呪文じみてきた。

とにかく、ものを書いて発表することは自分のためではなく、読者のためである、ということを確認したい、と思う。「小説の第一条件は、読者に興味を起こさせることである」(バルザック)。

こうは言っても、「小説家は本当に生まれながらにして小説家なのでしょうか」(大塚英志著「物語の体操」)。確かにすぐれた作家の出来上がった作品を読んでみると、こちらの創作意欲は完全に打ちのめされてしまう。ドストエフスキーや夏目漱石を読んだあとで、原稿用紙の白々したマスマ目に向かったとき、われは一体何を書かんとしているのか、と茫然自失して書く意欲は一気に阻喪してしまうのである。

しかし、それは出来上がったものを、完成した建物

を眺めているようなもので、穴を掘って基礎を固めたり大量の資材を運び入れたり、柱を立て、張りをめぐらし屋根を葺いたりする膨大な労力の集積を考えていないからだと思いたい。

マンガ自体は子どもの頃から大好きで、30代の半ば頃までよく読んでいた。それがある時期からさっぱりおもしろくなくなり、今ではまったく読まない。しかし、このところテレビや映画の原作がマンガ、というパターンが増えているのは、やっぱりおもしろいかなあ。

外国の有名なサッカー選手たちも、「キャプテン翼」において触発されるようである。イタリア代表のアルベルト・ジラルディーノはかく語る。「小学校のクラスメイト全員が翼に夢中だった。サッカーする時、誰もが翼になりきっていた。プロのサッカー選手になる事が夢だった僕らにとつて、翼が歩んでいた道こそ僕らの夢そのものだったんだ。でも、一番インパクトのあったプレイは実は翼のものじゃなくて立花兄弟のアクロバティックなプレイ!あの驚異的な技に、テレビの前の僕は口を開けたまま、身動きひとつできなかつたよ。」

以下次号

見果てぬ夢を(四)

山本 優子



四 日清戦争(承前)

客間に戻ると、雨田はふっと息をついて言った。

「倫太郎は、生まれつつ两眼とめ見えんとよ。学校へがっこいやいこつも出来へでけん。一日中へひしてじゅう猫を相手い部屋ん中で学校ごっこや暗誦へあんしよ」をしつせー過ごしちよい(倫太郎は、生まれつき两眼とも見えないのだよ。学校にもやれない。一日中猫を相手に部屋の中で学校ごっこや暗誦をして過ごしている)」

孝之進は、慎重に言葉を探しながら言った。

「わつせ頭へびんた」んよかお子さんごわすな(とても頭のいいお子さんですね)」「おそらくね」

雨田は、謙遜しなかった。

「気性へきしよ」はよかし、記憶力も抜群じゃ。鍼按術へしんあんじゅつ学ばすいしかなかごつ世間じや言わるっどん、あや学ぶこつが好っじやつで、後しばらっこげんして勉強へべんきよ」をさせつやろち思

「お」も。世の中で使へつ。けもんにならんでんね(気性はいいし、記憶力も抜群だ。鍼按術を学ばせるしかないように世間では言われているが、あいつは学ぶことが好きだから、もうしばらくこうやって勉強をさせてやりたいと思う。世の中で使いものにならなくともな)」

「倫太郎君の場合、先生ご夫妻のよな両親のもといい生へん」まれつ、幸せじやつち思へお」めもす」

「どげんかね。他ん盲児よつか幸せじやつなどと言わるつと、正直へしよじつ」などこい俺へお」や平静な気持へきもつ」じやおやならんごつない。倫太郎ん持つちよいもんぬ伸ばせつやいがならん」とが、悔しかとよ(どうかな。他の盲児より幸せだなどと言われると、正直なところおれは平静な気持ちでいられないの。倫太郎の持つているものを伸ばしてやれないのが、悔しいよ)」

孝之進は、頭をたれた。

「盲啞院ちゅもんがね、十年へじゅねん」ほど前じやつどん京都で初へはい」めつ開校した。盲人が学つがない学校へがっこ」があつち知つた時や飛つ上がらんばつかい喜へよろ」くだど(盲啞院というものがね、十年ほど前だが京都で初めて開校した。盲人が学べる学校があると知つた時は飛び上がらんばかりに喜

んだよ)」

「そちらい倫太郎君ぬやいつもいごわすか(そちらに倫太郎くんをやるおつもりですか)」

「いやー、聞ってくれ。その後東西でいくつか学校が出来(でけ)ちよつち言(ゆ)とやが、どうも経済的い成い立っちやらん所(とこい)ばつかいじやごたい。調ぶいうち、見えんもんと聞こえんもんぬいっしよい収容しちよいごつずい思われつきてね、倫太郎を送い気いならんとよ(その後東西でいくつか学校ができているといふんだが、どうも経済的に成り立っていないところばかりらしい。調べるうちに、見えない者と聞こえない者をいっしよに収容しているだけのよう)にさえ思われてきてね、倫太郎を送る気にならんのだ)」

雨田が孝之進にこのような淋しい表情を見せたのは初めてだった。

「コウ、俺い力があれば、盲児んためん学校を造つとじやがね。そうじや、お前いやつみらんか(おれに力があれば、盲児のための学校を造るんだがなあ。そ)うだ、お前、やつてみないか?)」

「はあ?」

「いやいや、冗談(はらぐれ)よ。すまん。忘れっくれ。俺いが実現不可能な夢をばらしてしもたね。は

はは(冗談だよ。すまん。忘れてくれ。おれの実現不可能な夢をばらしてしまったな。)」

しかし、孝之進は、何かに揺さぶられるようなものを感じた。

その年二十歳になった孝之進は徴兵検査に合格した。直ちに横須賀要塞兵として、砲兵隊に編入された。陸軍各兵科の中でも、砲兵は特に頑丈な者が選ばれる。幼いころから野外で走り回り、泳ぎ、重労働の焼酎作りや印刷所の荷物運びに汗を流してきた孝之進は体格もよく、力もあつた。

一八九四年(明治二十七年)、日清戦争が始まった。二十四歳になっていた孝之進は、「お国のために命を捧げる」と決心して従軍した。父尚一同様ここで倒れるかもしれない。それも、平壤(ぴょんやん)や満州(まんしゅう)といった地域で命を終え、母のもとには遺骨となつても戻ることができないかもしれないのだ。それでもよいと孝之進は考えることにした。今はこれがお国に尽くす道、と心に言い聞かせて海を渡つたのだつた。

孝之進は、どこで戦いどのような経験をしたのか、生涯語ることはなかった。手柄話になつてしまうのが嫌だつたのだ。軍曹にまで昇進したが、そのことも人

には語ろうとしなかった。戦争というものを通して、多くの命を奪った、二度と帰らない命をだ。お国のために貢献したなどと言えようか……。郷里に生きて戻ってきた孝之進は、心に深い傷を負っていた。それは、罪悪感とも言いうるものだった。

「俺は何のため生きちよつとじゃろ（おれは何のために生きているのだろう）」
孝之進の内では、今まで以上にこの思いが渦巻くようになっていた。

除隊後、孝之進は鹿児島で焼酎販売業の仕事についた。その関係で久留米（くるめ）の酒屋で働いて欲しいという話になり、一人久留米に移った。

孝之進が働くことになった酒屋はそこそこの名の知られた老舗だったが、近くには更に立派な門構えの酒屋、今村虹助（いまむら にじすけ）の屋敷があった。今村家のうわさは何かと孝之進の耳にも入ってきた。息子、娘たちを漢学の塾に通わせ、馬術や詩吟を習わせているという。二人の娘を東京に遊学させてもいたというのを聞いて孝之進は驚いた。その今村家へ使いに出来ることかしばしばあった。今村家の門をくぐるのは孝之進にとってちよつとした楽しみでもあ

った。家族や使用人の人当たりのよさには学ぶところが多かったし、飾られているみごとな書や絵画をそつと眺めるだけでも孝之進の好奇心は高まった。ただ、その家族の中で孝之進が苦手だったのは、娘の増江だった。今村家に伺い、

「毎度でございます」
と、挨拶すると、玄関に出てきてくれることがあるのだが、人の心を見透かすような涼しい目で孝之進を見下ろし、

「眠たそうにしとんなさる。顔を洗っておいでなさい」

と、言ったりするのだ。孝之進は、「はあ」などと返事をして増江と目をあわせないようにお辞儀をして上がるのだった。自分より少し年上らしいが嫁にも行かず、両親と共に住んで、やりたいことをしているらしき女性。東京で学問をしてきたということで、同じように東京で学んだ孝之進にあれやこれやと質問をしてきたことがあった。が、話はずむどころか、孝之進はなぜか頭の中が真っ白になり、しどろもどろになってしまったのだ。巡查に職務尋問をされている気分だった。怖い姉というのは、このような人のことだろうと思つた。

ある時、仕事の話がすみ、孝之進と今村が二人、茶で一服していたときである。今村が、ふいに尋ねた。

「コウどん、あなたには決まった人があるのですか」

不意をつかれて、孝之進は、

「いやー、わたしなどまだまだ……」
と、あわてた。

「前から家内と話していたんだがね。うちの増江をもらってはくだらんかと。土族の方にこんなことを言い出すのは失礼かと考えたが、時代も変わってきた。返事は急がんなら、考えてみてくれんですか」

孝之進は、絶句した。

いきなりふすまが開いた。立っていたのは、増江だ。

うろたえて目をふせた孝之進の頭の上から増江の聲がふりかかってきた。

「お父っちゃま、わたしにひとことも相談せずは何を言いなさるとですか。結婚は親が決めるのではなくて、本人同士で考えるべきことよ。コウさん、今は、聞かなかったことにしてください。父が勝手にこんなこと言い出したのを、わたし代わって謝ります。すみません」

増江は、ふすまを閉めて姿を消した。

五 光を失う

酒屋での一日を終えた孝之進は、暗い灯火のもとで書物を広げた。が、今夜は頭を抱えてすぐに本をとじてしまった。いつのころからであろう。両眼の視界に白い霧がかかったように見えるようになっていた。細かい文字がなかなか読めない。最初は疲れているからだと思つた。が、もうページ全体が白く濁って読めないほどになっているのを自覚した。孝之進は、それまで医者にかかったことがなかった。貧しかったためだけに、全く健康だったからである。だが、今回は、言い知れない不安を感じ、医者をたずねてみようと思つた。

仕事の都合をやりくりし、やっと眼医者に行つたのは、それから何日かたってからだ。医師は、時間をかけて孝之進の両眼を診てから、ため息をついて言つた。

「こんな眼病に詳しい医者を紹介しましょうか。難しい病気かもしれません」

「と、いいますと？」

「このまま進むと、やんがて失明しなさるかと思ひ

ます」

孝之進は、言葉を失い、医師の顔を見つめた。医師は、気の毒そうに言った。

「俗にいうシロソコヒということですと、……なるべく目を使いすぎないようにされて、おいしいものを召し上がりなされると、そう急に悪くはならないかもしれません」

「はあ」

孝之進は、上の空だった。

「そのうちいいお薬ができてくるかもしれない。大事になさってください」

孝之進は、どこをどう歩いたのかわからない。放心状態で家に戻り、さっそく仕事にとりかかった。「失明」という言葉が頭の中をぐるぐる回り、仕事をしながらも腕が震えてくる。見えなくなったら、いったいどうしたらよいのだ。自分で何もできなくなるではないか。なぜこのような病にかからなくてはならないのか……。悲憤を抱えながらも、孝之進はそのことを誰にも語らず悶々と仕事に取り組んで過ごした。

その夜は、どこにいても、光がまぶしすぎる、と何度も思った。なぜ、こんなにまぶしいのだろう……。医師に「失明」ということを告げられたために神経質

になっっているのだ、と思った。本を読むのもやめて寝床に入った。別の医者にかかり、治療法があるならやってみようかななどと、思いがぐるぐる頭の中をまわっていた。

翌朝目を覚ました孝之進は、仰天した。いつもと部屋の様子が違う。板壁の傷も布団の模様も薄ぼんやりとしか見えないのだ。薄紫の世界である。全身がわなわな震えてくるのを必死で耐えた。

六 修行

孝之進は、ほとんど見えなくなったことを周りに知られまいとした。見えているかのように普段どおり筆を持ち、仕事で必要なものを書いた。実際書くことができた。知った道を歩いたり、家の中で動いたりするには、困らなかつた。

翌日、少し霧が晴れたようで見えやすくなった。孝之進は嬉しくなり、このまま自然によくなくなっていくのではないかと思ったりした。これまで習慣的に神棚に手を合わせる程度だったが、真剣に回復を祈った。この神仏にでも、耶蘇の神様にでもいいから、癒してもらいたいと願った。藁にもすがる思いになっていて自分自身に孝之進は驚いた。自分は結構理性的で強い

人間だと思っていたし、そうなりたいと自分に厳しく励んできたつもりだった。なのに、眼を患っただけでこれほど無力で意気地のない者になってしまったとは……と、孝之進は夜床についてから声を押し殺して嗚咽した。

みじめでならなかった。

眼疾のことを人に言う勇氣がでないまま、日が過ぎていった。少し霧が晴れて見えやすい日もあれば、ほとんど薄紫の世界で触ってみるまで形が把握できない日もあった。が、一進一退確実に見えにくくなっていくのがわかった。ついに、主人が孝之進を座らせて、以前から気になっていたのだが、目が悪くなったのではないかと訊ねた。孝之進は観念して、正直に眼疾のことを話した。主人が驚いたの言うまでもない。さつそく評判のよい病院に孝之進を連れていった。

今度の医師は、孝之進の視力はもう取り戻せないだろうとはつきり宣告した。治療を試みるより、失明してから食べていけるための準備を始めることを勧められた。

覚悟はできてきていたものの、孝之進は全身が崩れそうな気がした。それでも必死で笑顔さえ作って受け答えをし、主人と医師に感謝の思いを伝えた。

漢点字訳書の「ご紹介」

生田典子著、『アメリカはカースト社会（公立高校の教壇から）』（武蔵野書房、一九九六年）

「あとがき」を以て、「ご紹介」に替えさせていただきます。

あとがき

一九九三年夏から殆ど毎日のように日本にいる家族や友人に書き送ったレポートを、一字一句いじらずにそのままここに載せました。その時の生の感性を大事にしたかったからです。日本に帰って、家族と友人に囲まれた安全な生活の中で読み返すと、一人で突っ張っていた自分が見えます。安全な日本について考える「アメリカ」と実際に住んでいた「アメリカ」との間にはとても大きなギャップがあることも実感します。一人で「アメリカ」に住み、仕事をするのは学生として滞在するのとも、旅をするのとも異なっていました。つらいこともありましたが、よく言われるように「旅人には優しいアメリカ人は、競争相手には厳しい」ところもありました。

これまで伝えられたアメリカ観は大都市に住む日本

人からのもの、特に大会社、大学関係、マスメディア、芸術家などからのものが多く、しかも家族と一緒だったりした「日本」を持ち込んだの「アメリカ」ではないかと思うのです。私が出会った日本人の中には親方日の丸のバックアップも何もなく、アメリカに一人住んでガンバっている人たちがいました。そういう人々は一様に「実はアメリカが嫌いになった」と告白していました。私にも同じ思いをしたことが何度もあります。ところが日本に帰ってくると、つらかったことも、不愉快だったことも、みんな思い出は甘美に蘇ってきて、「アメリカ」がすばらしくなっていくまです。それでも今は、映画やテレビ、本や雑誌や新聞に表われる「アメリカ」の欺瞞を見抜くことができま

す。
アメリカに住んだ前と後ではアメリカ観が変わったかどうか、と友だちに聞かれるたびに、私はハッキリと変わった、と答えています。先ず、アメリカはカースト社会の国であるという実感です。アメリカは人種の坩堝ではなく、住み分けの社会であるということだと思います。またアメリカの自己主張というのは、自己弁護の主張であって、日本でよく言われるような高邁なものではありません。デイビイトにしても日本では非常に

誤解されています。あくまでも相手を言い負かすというところにポイントが置かれ、正義感に裏打ちされている討議では決してありません。一般の人々の話です。自由の国と言われるアメリカですが、自分の身分に関わるところでは決して自由に発言出来ず、「本音と建前」がある社会でもありました。親しくなった者同士では「白人、黒人が共学するようになった六十年代以後、アメリカの教育は悪くなった」などと黒人に対して不満を述べながら、建前では「ノープロブレム」と澄ましています。ある白人ばかりのパーティーでスピーチを頼まれ、アメリカの教育について質問を受けたことがあります。

「日本とアメリカで教育に携わっているあなたに聞くのだから、正直に答えて欲しい。ほめ言葉はいらない。我々も悩んでいるのだから。アメリカの問題点が見える筈だからそこを聞きたいのだ。正直にお願いします」と懇願されて、最初躊躇しましたが、ついに正直に感想を述べたことがあります。ところが一週間後には教育委員会に呼ばれ、教育長と副教育長にこつてりと油を絞られました。学校以外のパーティーで学校内のことを喋ったと言って抗議されたのです。私のコメントは正しくないというのです。それなら堂々とその

パーティーの人に言うべきであるのに、それをせず、陰で私を責めたて、そのパーティーの人々に「わび状」を書け、と迫りました。私は、「アメリカは『言論の自由』の国ではないのか。私の責任において私個人のコメントであると表現しているのだから、わび状を書く必要はない」と突っ張りました。

後で、そのパーティーの主催者の一人である教会の牧師に相談しましたが、その必要がないということに結局無視しました。その牧師が言った「あなたはアメリカの汚い部分に触れることが出来ましたから、ある意味ではよかったですね。あなたが旅人でない証拠ですね」という言葉が忘れられません。

日本にいるとアメリカが非常に近く感じられますが、アメリカにいると日本は非常に遠い国でした。日本で言う「アメリカ」は殆ど大都市であり、中流以上のインテリのイメージですが、地方に住む多くのアメリカ人は、そのイメージからはほど遠いのではないのでしょうか。貧富の差が大きく、教育の分野でも優秀な者とそうでない者の差は日本の比ではありません。私たちは、どうしても自分の物差しで他を測ってしまいがちですが、その物差しの目盛りそのものが異なることを実感するのは、一人で住むという「体験」が必要

なのかもしれません。

一九九四年秋、日本に帰ってきてすぐに日本で初めて開かれた「東アジア女性フォーラム」の裏方を務めました。歴史的に共有するものを持つ東アジアの女性たちは、たとえ言葉が異なっても何か共在感がありました。そして、この夏に北京で開かれた第四回国連世界女性会議のNGOフォーラムに参加した際にも同じことを感じてしまいました。今から十年前の第三回ナイロビ会議では、アフリカの人々よりも欧米人が多くいたように感ずるほど、先進国の白人が光って見えました。そして十年、今回の北京会議ではアジア人が多く、アジア・アフリカの人々のパワーが溢れ、白人たちが目立たない存在に感じたのは、世界の時の流れの結果であると同時に、私の白人に対する信仰が崩れたからに違いありません。ナイロビ会議で私たちが羨望の眼差しで見たアメリカの女性たちは、アメリカの中でも優れた活動家たちであって、普通の人々は今でもかなり保守的な考え方に束縛されていました。そんなことは知識では分かっていることなのですが、「実感」によって自分のものになったということです。

最近のOJシン普森事件でも分かるように、白人が有色人種に対して本音のところを持つ差別意識は、

日本人の想像力を超えるという実感もあります。だからと言って国粹主義者にはなっていないませんが、アジア人としてのプライドをくすぐられたことも確かです。「人類みな兄弟」という言葉は、言うのは簡単なことですが、実感するためには幾多の苦勞をし、忍耐と努力がいることでしょう。だからこそスローガンなのですが……。では、私は「アメリカが嫌いになったか」というと、そんなことはないのです。親しくなった友人たち、あの美しい自然が恋しいのも事実です。アメリカの持つダイナミックな力も魅力的です。

今、アメリカナイズされていく若者の生活を見ながら、彼らがアメリカに一人住んで仕事をするようになってきた時には私のような「実感」はないのかもしれないと思ったり、否アメリカの若者たちと共有文化を持つという錯覚から、もつと激しいショックを受けるかもしれないと思ったりもしています。いづれにしても、小さな島に住んで内輪で生活していると「精神的ガラパゴス」になってしまえますから、外の荒々しい世界に身を置く人が増えることを期待しています。そして私も、海の向こうへ今後何度も足を運んでは体で異文化に触れ、「実感」をしたい、と思っっています。

日本に帰ってきて、すぐこれらのレポートをまとめようとしたのですが、次々と大きな仕事に開わり、自分のことは後回しにする性格もあって、原稿はずっと部屋の片隅に押し込まれていました。武蔵野書房の福田さんにプッシュされなかつたら今でも原稿を放置したままであるに違いありません。その上、北京会議の報告書作成に時間を取られ、初ゲラの校正もままならぬ福田さんにはずいぶん迷惑をかけてしまいました。感謝とおわびを申し上げます。また、アメリカからの私のレポートの愛読者であり、何かと励ましてくださった劇作家の木庭久美子さんには心から感謝しています。

一九九五年秋

生田典子

【著者略歴】

1935年、東京に生まれ、すぐに父親の仕事の関係でマニラに住む。1958年、東京女子大学英文学科を卒業。その後北鎌倉女学園、相模工業大学（現在、湘南工科大学）付属高校にて英語の教師として教鞭をとったあと、1993年バージニア州ノーサンプトンハイスクールに交換教員として勤務し、翌年帰国。その他、視覚障害者のために朗読をし、地元でよ

い芝居を上演するための実行委員をする。また第3回国連世界女性会議・ナイロビ会議、東アジア女性フォーラム、第4回国連世界女性会議・北京会議に参加し、「男女でつくるいい社会」を目指す。現在地元の鎌倉市民同窓会の環境部に属し、鎌倉FMラジオでは「イクタノリコのつれづれ日記」で様々なメッセージを発信中。

~~~~~

## 「東京漢点字羽化の会」

### 第15、16回例会報告とわたくしごと

木村 多恵子

#### 第15回例会、2007年2月7日（昼）

現在皆さんが手元に抱えておられる、二冊の本の入り方方法について、やはり本の細部にわたり質問があり、熱心に話し合われた。お茶の一口も飲む余裕もなく、時間は瞬く間に過ぎて行く。

今日は思いがけない話を伺った。この会で、初の漢点字訳をしていたいただいた本、「翼のある言葉」の著者、紀田順一郎さんと、ガイドヘルパーをしてくださっている方のご主人とが、高校、大学共に親しい同級

生とのこと、奇遇であり、なんだか胸がワクワクした。

1月に行われた「横浜漢点字羽化の会」の新年会の刺激を受けて、東京でも懇親会を開いてはどうか、と自然発生的（もしかしたら木村が実際の発案者かもしれない）に盛り上がり、3月中の土曜の夜を目的に、参加者の多い日を決めることにした。

結果として、3月10日の夜に、一人の会員のお世話で、例会会場近くのお店を選んでいただいた。

#### 第16回例会、2007年3月7日（水・昼）

今日は新しく始める「視覚障害者のための漢点字学習会」に参加してくださる方が、例会の様子を見学に来られた。この方は、既に漢点字を日常的に使っておられるのだが、「漢点字を広める」ために、仲間が一人でも多い方がよいとの思いから、木村がお誘いしたのである。

「学習会」の進め方についての大枠を説明し、具体的に、皆様にどの点をお手伝いしていただきたいか、最寄り駅までの送迎のことも含めて、ご協力をお願いした。

現在4人プラス1人の方が参加してくださる予定に

なっている（3月12日現在）。

「学習会」用のテキストとレーズライターやその用紙、そして一人分の筆記具は、岡田さんが用意してくださる。筆記具は他の方たちは持っていられることが分かった。

チラシをもっと配ってくださる、とのお申し出があり、木村からお送りし、お願いすることにした。随時何時からでも参加は可能なので、チラシはまだまだ配布していただきたい。

日本点字図書館発行のテープ雑誌「ホームライフ」、東京都盲人福祉協会発行の「点字東京」、ロゴス点字図書館発行の点字雑誌「あけの星」、そして点字毎日新聞の「情報フォーラム」に、各1回ずつではあるが、「学習会」の広告を掲載していただいた。

放送大学のテキストの入力方法については、内容が、和歌であったり、漢文であったりと、様々であり、それぞれにふさわしい入力方法を検討した。また、注の扱い方についても、どんな形が、もっとも理解しやすいか、今日もパソコンを使って、岡田さんが丁寧に説明した。とくに注の項目が、単純に人名や地名の場合は、どの言葉に対しての注であるかを確定しやすいが、歌全体であったり、何首かの歌にわたって

いたり、漢文であったり、また、長めの引用文だったりすると、注の項目をどこまで書けばよいかなど、語句を限定するのが難しく、いろいろ皆様のご苦勞をなさっていられることがひしひしと伝わってきた。

「羽化」6号をお配りした。

懇親会は、3月10日、「浜松町モノレールセンター」にある「東海飯店」で12人で楽しいひとときを過ごすことができた。

### \* 予告

4月の例会（第17回）、2007年4月11日（水・

夜）、18:30～20:30、7階 第一会議室

第1回「視覚障害者のための〈漢点字〉学習会」

（通称〈学習会〉）

4月21日（土・夜）18:30～20:30

ヒューマンプラザ7階第一会議室

5月の例会（第18回）、2007年5月9日（水・

昼）、13:30～15:30

7階 第二会議室

第2回学習会、5月19日（土・夜）

18:30～20:30

7階第一会議室



## わたくしと

入力していただいたテキストを読みながら、先ず皆様に感謝をせずにはいられない。一文字一文字がいと嬉しい。読めない文字や人名が出てくると、エーブルデイクや広辞苑を見る。辞書の扱い方がまだ不十分なので、それでも分らないと、図書館へ飛んで行く。正直なところ、エーブルデイクで見つけ出すと、改めて岡田先輩の勉強の後が明瞭で、頭が下がる。そして、わたしにこの勉強を勧めてくださる理由が一層よく理解でき、こんなわたしでも「やらなければ」との思いが迫ってくる。

『竹取物語』について読んだが、むろん物語の筋立てはごくごくおおよっぱである。けれども昔、きれぎれながらもかなりこの物語を読んだことを思い出し、當時を懐かしくよみがえらせた。

竹取の翁が、ある日、竹を取りに竹藪に入り、「すぐれて元光る竹」を見つけ、切ってみると「三寸ばかりなる、いと清げなる小さき姫出、いで<sup>き</sup>きにけり」(文章そのものはこの通りかどうかあやしいが、そんな印象がある)

こんなはじまりと、5人の貴公子の求婚譚。彼らに、無理難題な条件を言い渡しながら、なよ竹のかぐ

や姫には結婚する意思など皆無ゆえの難題である。さらに、今上天皇の狩にかこつけての御幸、かぐや姫の昇天の壮大さはよく知られている。

石作りの御子には、「仏の石の鉢」。くらもちの皇子には、「東・ひんがし<sup>き</sup>の海に蓬菜といふ山あるなり。それに白金を根とし、黄金を茎とし、白玉を実として立てる樹あり、それ一枝」。阿倍の右大臣には、「紅蓮の炎に入れても燃えない、火鼠の裘、かむごろも」。大伴の大納言には、「龍の首に五色に光る玉」。石上、いそのかみ<sup>き</sup>の中納言には、「つばくらの持てる子安貝」。

これらそれぞれに与えられた難題の中で、わたしが心惹かれたのは、子供のこととて、当然、美しい白金の一枝と、まか不思議なもの、燃えさかる火の中に投げ入れても燃えない火ネズミのかむごろもであった。ところが、その一枝は、蓬菜へ行かずに、細工師を都から人里離れた所に集めて内緒で作らせたものだったし、裘、かむごろも<sup>き</sup>は火に入れるとたちまち燃え尽きた。

この物語を今思い起こしても気になることは、かぐや姫が、あんなに、ふるさとである月の都に帰りたいがらなかったにもかかわらず、否応なしに天の羽衣を着せられ、天翔ける御車に乗せられると、さっぱりと、

そう、まったくきれいきさっぱりと、全てを忘却してしまふことである。父親、もしかしたら恋人とも見まごうほどの愛情を示していた、竹取の翁に対する思いまでも忘れてしまふ。まるで翁に会ったことも無く、「人の世に居た」ことさえ無く、それどころか、月の世界以外何も知らないもののように、つまり、この世は、かぐや姫にとつて「仮の世」どころか、痕跡さえなくなるのである。もっと不思議なのは、姫が人の世に居たとき、「月の都」へ戻るのを拒んでいたとはいえ、古里を忘れてはいないことである。

これらのことが気になる。今回この物語の成立年代は、おおよそ859〜885年であり、宗教的背景として、儒教、道教、仏教などの影響を受けた人が書いたのであろうということ、ほんの少しだけ知ったのだが、当時、「死」とはそのように、この世とは全く隔絶したものと考えたのだろうか。

わたしは、「死」を考えたとき、最初は自分が焼かれたり、土の中に埋められるのが怖かった。次に、肉体の滅びは恐ろしいものではなく、魂の滅び、この「思い」は何処へ行くのか、それが問題になった。かぐや姫のように何もかも「無」に帰するならばそれはそれで気楽であろう、とも考えた。しかし、わたしには、どうしても魂が無に帰することを容認でき

なかった。五歳のときからキリスト教の養分を吸ってきたわたしには、当然の帰結であろう。

ところが、今から20数年前の小さな体験は、不思議だった。わたしにとつては気がかりな手術で入院から退院までの経験の中で、医者から「あと一週間もすれば退院できますよ」と言われたとき、病院がけつして居心地のいいところではなかったはずなのに、そして帰宅したい思いもありながら、「退院」は不安をともない、心のどこかで、「まだここに居たい」と密かに入院が長引くのを願っていた。けれども、その日が来て、実際に我が家へ戻り、日一日と増すごとに、不安は消え去り、安堵が増し、どんどん、あの看護婦さん、この看護婦さんのこと、同室の方たちの優しさ、日々の回診のこと、それらすべてが徐徐に遠のいて行き、感謝だけがフンワリと心に残った。むろん、病院へ戻りたいなどとは思わなかった。この感覚はなんだろう？ そう感じたとき、何故かかぐや姫の昇天の場面を思い出し、そのミニ体験をしたような気がした。

わたしたちは確実な「死」はともかく、「なにか」をするとき、このような小さな「死と誕生」を幾つか経験してゆくのではないかと思つた。

2007年3月21日

高祖人と為り

卷八・漢高祖本紀

高祖爲人、隆準而  
 龍顔、美須髯。左股  
 有七十二黑子。仁  
 而愛人、喜施、意豁如  
 也。常有度、不事  
 家人、生產作業。及  
 壯、試爲吏、爲泗水  
 亭長。延中、吏無所  
 不狎侮。

隆準は鼻。隆は高い。  
 龍顔は龍の眉のあたりが盛り上がった長い顔。龍は天子の象徴。天子の顔。

須髯はあごひげ、髯はほほひげ。黒子ほくろ。七十二は吉数または聖数。豁如からつとして開けている様子。豁然と同じ。大度量が大きいこと。狎侮あなどりばかにすること。

高祖人と為り、隆準にして龍顔、美しき須髯あり。左の股に七十二の黒子有り。仁にして人を愛し施しを喜び、意豁如たり。常に大度有り、家人の生産作業を事とせず。壮に及び、試みられ吏と為り、泗水の亭長と為る。延中の吏狎侮せざる所無し。

漢王朝の開祖にふさわしい記述として、高祖(劉邦)の容貌と人徳をたたえるが、生業には励むことなく、壮年になって仕官すると、役人達は皆高祖をばかにした、と記されている。

(この後、高祖に備わる不思議な力について述べる。)

「好酒及色」(酒と色を好む)高祖はついで酒を買い、酒店で寝てしまうと、不思議なことに「其上常有龍」(体の上にもいつも龍がいる)。飲むほどに酒の売り上げが数倍にもなるので、酒店では年末になると掛け売りの証文を破り捨てて借金を棒引きにした。



高祖爲リ人ト、隆準ニシテ而  
 龍顔、美シキ須髯アリ。左ノ股  
 ニ有リ七十二ノ黒子。仁ニシテ  
 而愛シ人ヲ喜ビ施シテ、意  
 豁如タリ也。常ニ有リ大度、  
 不事トセ家人ノ生産作業ヲ。  
 及ビ壯ニ、試ミラレテ爲リ  
 吏ト、爲ル泗水ノ亭長ト。  
 延中ノ吏無シ所不ル狎  
 侮セ。

**行頭下点** 上記1行目 行頭の $\begin{smallmatrix} \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \end{smallmatrix}$  (6の点)

高祖の $\begin{smallmatrix} \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \end{smallmatrix}$  (高)のように、最下段の2点 $\begin{smallmatrix} \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \end{smallmatrix}$ を含まない漢点字が行頭に来た場合、 $\begin{smallmatrix} \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \end{smallmatrix}$ を前置して、下6点の仮名点字 $\begin{smallmatrix} \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \end{smallmatrix}$ (さと)と読みちがえないようにしています。



漢高祖（劉邦）

※ 新開高明『語法詳解 史記』（旺文社）を参照しました。

**前回の訂正とお詫び**









史記の説明文中、「本義」とあるのは、「<sup>ほんぎ</sup>本紀」の誤りです。

# 漢点字講習用テキスト

## 初級編 第二回（全十回）

本会が実施しております「漢点字講習会」のために書き下ろしたテキストです。これから本誌でご紹介して参ります。

※ 本稿は点字符号の引用が多いため、見やすさを考慮して横書きで表示することにします。


\*これから〈漢点字〉をご紹介しますが、従来の点字にはない点字符号が出て来ます。先ず、「（6の点）」は、「行頭下点」と呼ばれる符号です。点字符号の下の二つの点「」がない漢点字「」が行頭にあるとき、「」の符号と混同しないよう前置するものです。「」のようになります。また、「」で括られた点字符号は、カタカナを表します。

### 1 基本文字（1）

#### 漢数字（1）

漢字にも数字があります。「漢数字」と呼ばれます。

漢点字では「」の形で表されます。

「」は、〈漢数符〉と呼ばれます。



数値は、

で表されます。ご覧の通り、点字の数字と同じ点字符号です。

また、漢数字には、桁を表す数もあります。

順に見て行きましょう。

(1)   イチ イツ ひと - つ

数の1、ものの初めの意味です。

(2)   ニ ふた - つ

数字の2、ふたつ、二番目の意味です。

(3)   サン みっ - つ

数字の3、みっつ、三番目の意味です。

(4) 四 ☵☵ シ よっ - つ  
数字の4、よっつ、四番目の意味です。

(5) 五 ☵☶ ゴ いつ - つ  
数字の5、いつつ、五番目の意味です。

(6) 六 ☵☱ ロク むっ - つ  
数字の6、むっつ、六番目の意味です。

(7) 七 ☵☲ シチ なな - つ  
数字の7、ななつ、七番目の意味です。

(8) 八 ☵☳ ハチ やっ - つ  
数字の8、やっつ、八番目の意味です。

(9) 九 ☵☴ ク キュウ このの - つ  
数字の9、こののつ、九番目の意味です。

(10) 十 ☶☶ ジュウ とお

数字の10、とお、10の位を表します。この字は数字でもありますが、数を超えた意味を持っています。第一基本文字として後にも出て来ます。

「☶☶を聞いて☶☶を知る」

(11) 廿 ☶☱ ニュウ ジュウ ニジュウ  
「十 ☶☶」が二つの意味です。

「☶☱日市」

(12) 百 ☶☶ ヒャク もも  
数の百の桁に用いられます。数の多いという意味があります。

「☶☶聞は☶☶見に如かず」

(13) 千 ☶☳ セン ち

数の千の桁に用いられます。数の多い、数え切れない数の意味に用いられます。

「☶☳夜☶☳夜物語」「今は☶☳船☶☳☶☳船」

(14) 万 ☶☳ マン バン よろず  
数の万の桁、非常に数の多い様子、あらゆるものの意味を表します。

「億に億つ」「客来」「朝報」

(15) 億 オク  
数の億、万の一万倍、気の遠くなるほどの数の意味があります。

「土」「中国の人口は人」

(16) 兆 チョウ きざし きざ-す  
数の兆、天文学的な数、数えられない数の意味。また、草木の芽生え、何かこれから興る感じ、きざす、きざし。

「候」「前」

「.....」

\* ○ ゼロ れい

これは漢数字ではありませんが、漢数字を慣用的に、算用数字のように表記するときに用います。

「電話 .....」

### 近似文字 (1)

#### 漢数字の近似文字

上に挙げた一六個の漢数字の近似文字、五つです。

(1) 厶 ア つ-ぐ  
「一」の近似文字です。後につづく、それに準じたの意味です。  
「細」「鉛」「熱帯」

(2) 参 サン まい-る  
「三」の近似文字です。正式の書類には、この字を三として使います。

「加」「詣」「日」

(3) 丸 ガン まる-い  
「九」の近似文字です。まるいものという意味があります。  
「弾」「日の」「シップ」

(4) 意 イ (こころ)

「億」の近似文字です。億の人偏のない形です。字形は「音」の下に「心」です。

「思」「識」「見を述べる」

(5) 元 ゲン ガン もと

「兆」の近似文字です。物事のはじめの意味があります。

「気」「日」「旦」「足」

.....

## 2 基本文字 (2)

### 1. 第一基本文字 (1)

〈第一基本文字〉とは、一マスの漢点字です。〈一マス漢点字〉とも呼ばれます。

この点字符号をカナ点字で読んだときの50音順にご紹介します。まずは、漢点字の基本的なパターン「」から。

(1) 目 モク め

漢点字の基本的な形です。墨字は、目の形に由来しています。部首となって、目に関する事、見ることを表す文字の要素になります。

「前」「注」「覚まし時計」

(2) 糸 シ いと

細い「いと」の形に由来した文字です。紡績、織物、縫製など、いとに関わる幅広い意味を持っています。部首の「いと偏」として、多くの文字の要素となります。

「絹(きぬいと・けんし)」「口」「乱れず」

(3) 系 ケイ つな - ぐ つな - がる

墨字では、「糸」の上に小さなノの字が付いた形です。つなぐ・つながるの読みと意味があります。漢点字では、〈第二糸偏〉として、二つ目の糸偏に用いられます。糸偏の文字が沢山あるからです。

「統」「図」「列会社」

(4) 比 ヒ くら - べる

墨字では、人が二人並んだ形で、カタカナのヒを横に並べた形です。ひかくする・くらべるの意味があります。漢点字では、後で出て来る、〈比較文字〉の符号「」として用いられます。

「𠄎𠄎較」「対𠄎𠄎」「背𠄎𠄎べ」

(5) 数𠄎𠄎 スウ かず かぞ - える

数を数える、沢山の数の意味があります。漢点字では、漢数符「𠄎𠄎𠄎」  
として用いられます。

「𠄎𠄎学」「算𠄎𠄎」「𠄎𠄎え歌」

(6) 家𠄎𠄎 カ ケ いえ や

屋根のある「いえ」です。漢点字では〈ウ冠〉として、建物に関係する  
意味を表します。

「𠄎𠄎屋」「𠄎𠄎族」「𠄎𠄎主」

(7) 宿𠄎𠄎 シュク やど やど - る

人が寝起きする建物です。漢点字では〈ウ冠、ワ冠〉として用いられます。

「𠄎𠄎泊」「𠄎𠄎舎」「下𠄎𠄎」「𠄎𠄎屋」

(8) 学𠄎𠄎 ガク まな - ぶ

屋根の下で、子供が勉強している形です。漢点字では〈ツ冠、ナベブ  
タ〉や他の冠として用いられます。

「𠄎𠄎校」「𠄎𠄎問」「科𠄎𠄎」「𠄎𠄎舎」

(9) 言𠄎𠄎 ゲン ゴン い - う こと

口を開いてものを言う形を表しています。部首では、〈言偏〉になって、  
言葉に関する意味を表します。

「𠄎𠄎明」「発𠄎𠄎」「𠄎𠄎葉」「𠄎𠄎い訳」

(10) 語𠄎𠄎 ゴ かた - る

墨字では「言偏」に「吾」の形です。言葉を発して話をすることを表  
しています。漢点字では、〈第二言偏〉として、二つ目の言偏に用いられます。

「𠄎𠄎𠄎𠄎」「日本𠄎𠄎𠄎」「英𠄎𠄎𠄎」「物𠄎𠄎𠄎」

(11) 頁𠄎𠄎𠄎 ケツ ページ

大きな頭を表しています。部首としては〈おおがい〉になります。

(12) 貝𠄎𠄎 バイ かい

海の生物のカイです。古く中国で、貨幣に子安貝の貝殻が使われてい

たことから、財産や交易に関わる文字に、〈貝偏〉として用いられます。  
カイの名前の字には〈虫偏〉が多く用いられます。

「𧰨𧰨殼」「𧰨𧰨巻き」「𧰨𧰨𧰨枚」「𧰨𧰨子安」

.....

## 近似文字 (2)

(1) 真𧰨𧰨 シン ま まこと

「目𧰨𧰨」の〈近似文字〉です。まこと、本当の、実際のの意味があります。

「𧰨𧰨実」「写𧰨𧰨」「𧰨𧰨っ直ぐ」「𧰨𧰨っ青な空」

(2) 面𧰨𧰨 メン おも も おもて つら  
む - ける

「目𧰨𧰨」の〈近似文字〉です。カオ、あるいはカオに付けるメンです。  
また、カオを向ける、おもて、広く平らなものという意味があります。

「表𧰨𧰨」「𧰨𧰨積」「水𧰨𧰨」「𧰨𧰨変わり」

(3) 云𧰨𧰨 ウン い - う

「言𧰨𧰨」の近似文字です。蒸気が立ちこめている状態を象った文字です。  
多くの文字に、部首として含まれます。

「𧰨𧰨𧰨𧰨」

(4) 首𧰨𧰨 シュ くび かしら

「頁𧰨𧰨」の〈近似文字〉です。アタマの形を象った字です。人のクビ、  
人の上に乗ったもの、人を束ねる人などの意味があります。

「𧰨𧰨相」「元𧰨𧰨」「𧰨𧰨筋」「𧰨𧰨っ玉」

(5) 具𧰨𧰨 グ つぶさ そな - える

「貝𧰨𧰨」の〈近似文字〉です。何かをしたり作ったりするときを使う  
もの、何かのために、こまごまと用意するものという意味があります。

「𧰨𧰨𧰨𧰨」「道𧰨𧰨𧰨」「𧰨𧰨体」「𧰨𧰨合」

.....

## 「報告と」案内

一 本誌・機関誌『うか』、十一年目を迎えました

隔月に、年六回発行して参りました。本号が六十一号、十一年目に入りました。読者諸兄姉のご支援の賜物と、深く御礼申し上げます。

本号から、漢点字講習会で使用しております、本会オリジナルの漢点字学習用テキストを、順次掲載して参ります。川上先生の「漢点字解説」を第一の参考資料として、また「漢字源」（藤堂明保編、学習研究社）と「常用字解」（白川静編、平凡社）等、本会が漢点字書として製作した書籍を大きな力として、その他逐次必要な資料に当たりながら執筆しております。

## 二 漢点字講習会

今年度から東京でも、漢点字講習会を開催致します。

①横浜…横浜市健康福祉局、同教育委員会、同社会福祉協議会のご後援をいただいて、隔月に開催致します。第一回、五月五日（土）一四・〇〇から、市民活動支援センター（JR・横浜市営地下鉄、桜木町駅下車）四F・会議室で。

②東京…四月二一日（土）一八・三〇から、港区ヒューマンプラザ（JR・浜松町駅、都営地下鉄浅草線・大江戸線・大門駅下車）七F・第一会議室で行います。

毎月第三土曜日に予定しております。お申し込みは随時お受けしております。

## 三 横浜市中央図書館への納入書

『論語』（金谷治訳注、岩波文庫）を納入致します。詳細は次号でご紹介致します。

## 四 本誌『うか』の編集について

前号でもご報告致しましたように、『うずれば』は使命を終えたものと終刊し、東京漢点字羽化の会の活動報告やレインボー白金からのご報告は、本誌に欄を設けて掲載致します。

## 編集後記

▼前号から漢点字講習用テキストの掲載が始まりました。これは、「漢点字講習会」のために岡田代表が自ら書き下ろしたテキストです。▼本稿は点字符号の引用が多いので、見やすさを考慮して横書きで表示することになりましたが、そのためにページ番号の付け方が変則的になりました。横書き部分のページ番号は横1、横2：として、本来のページ番号に併記してあります。

E-MAIL (岡田健嗣) : eib\_okada@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://ukanokai.web.infoseek.co.jp>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は6月15日です。

※本誌(活字版・テープ版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。